

トンカチと花将軍

作 舟崎克彦
舟崎靖子



トンカチと花將軍



トンカチと花將軍

©一九七一年二月一日 初版発行

一九七七年九月二〇日 第八刷

著者 舟崎克彦・舟崎靖子

発行 福音館書店 郵便番号一〇一

東京都千代田区三崎町一丁目一番九号

電(一九三三四)一振替東京五一一七六四五

印刷 三美印刷

製本 黒岩大光堂

N D C 九一三 / 二二四 ページ / 一五 × 二二 cm

無理な扱いをしないのに、お買い上げ後一週間以内に
こわれたような本がございましたら、お買い上げ月日、
書店名をご明記のうえ、おそれいりますが、本社にご
返送ください。責任をもっておとりかえいたします。

もくじ

ある日トンカチとサヨナラは 1

あねもね館^{やど}についたということは 13

気をつけの森でウィラーは 54

どろのつくえでお習字^{しゅうじ}のカエルは 73

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会





大たつ巻^マきがやってきたということは

108

花ざかりの榎^かが百年目の榎^かだったということは

将軍^{しょうぐん}がくしやみに勝ったということは

165

さてこの物語^{ものがたり}のいよいよは

187

さし絵 舟崎克彦

139



ある日トンカチとサヨナラは



「さあ、花をさがしにいこう、サヨナラ。」トンカチは、広っぱのはずれに長々とつづいていくへいに向かって歩きながら、足元にじゃれついている犬のサヨナラに声をかけました。

「おい、トンカチ。三番を打たしてやるからはいっていかないか！」

いつものようにデニムのつりズボンをはいたトンカチと、白い巻き毛をなびかせて歩いているサヨナラの姿をいち早くみつけて、同級生のノンがホームベースのあたりからどなっています。

「きょうはダメなんだよお！」

かん声をあげてサッカーボールを追いかけていく一団をよけながら、トンカチは手をふつ

てことわりました。そして、（きようはダメなんだ。何が何だつて花をさがしにいくんだから。）と、もう一度自分にいい聞かせると、外野のずつとうしろをまわつて、やがてへいのくずれ目をまたいで中にはいつていきました。

広っぱで野球をしている少年たちの間で、そのへいは『ホームランのへい』と呼ばれていました。そこから向こうへ打球がはいればホームランという意味です。

けれど実際のところ、そんなに遠くまで球を飛ばすことができるのは、トンカチの仲間ではばか力のノンぐらいなものでした。

だから時たまジャンケンでまけた子が、しぶしぶ球を取りにへいを越えるほかには、木立ちが森のようにおい茂つた庭や、そのずつと奥にあるというくずれかけた石垣、かれ果てた古井戸、雨風にさらされて土台だけになった巨大な屋敷跡のほうまで足をのぼすものはだれひとりとしていなかったのです。

何もそんな所までいかなかったつて、花ならどこにだつてあるだろうに……皆さんはそう思うかもしれません。

けれど近ごろはどこをさがしても花がみつからないのです。『にぎやか通り』の街角の花屋さんからも、公園や学校の花壇からも、線路わきの土手からも、そしてあんなに花の大好

きなさくらちゃんの家の庭からも、花はある日突然姿を消してしまったのです。けれどそのわけを知っているものはだれひとりいませんでした。

（そうとも。こんな時こそぼくは、さくらちゃんの誕生祝いに花をプレゼントするんだ。）

うちようてんになって、木立ちの合間をぐるぐるとかけまわっているサヨナラを見やりながら、トンカチはつぶやきました。

「ノンやケンはプラモデルや絵本をプレゼントするらしいけれど、さくらちゃんがいちばんほしがっているのは、花にきまつているんだ。そうだろう、サヨナラ。」

トンカチは、深々とした下草をふみしだきながら、木立ちの間をぬって歩いていきました。けれど、期待をうらぎって、あたりにはニレやブナの大木が無愛想に茂っているだけで、ひと株のスマイレさえ見あたりません。

「おーいセンター。もつとバックだ！」

さつきまですぐ身近で聞こえていた広っぱのかん声も、歩いていくにしたがつてだんだんと小さくなり、やがてそれも、頭上でザワザワと鳴る暗いこずえの音にかき消されてしまいました。

トンカチは足を一步ふみ出すごとに不安になってきました。まるで自分の足が、あたりの

静けさや暗い木立ちの意志にうごかされて歩いているような気分なのです。

「もう帰ろうか、サヨナラ……」

トンカチは目の前の草の穂にじゃれついているサヨナラに声をかけました。

そのとたんです。深い緑にけむったしげみの奥を、何だか白くてまるいものがフワリと横切っていたのです。

サヨナラはとつさに、しつぽをピンと立てて身がまえると、次の瞬間には白いものを追ってもうれつにかけ出していました。

「あ、サヨナラ。帰っておいで！」

トンカチはあわてて叫びました。けれどサヨナラはふり向きもしません。木立ちの間をまるで風のように走り去っていきます。

トンカチは背の低いこずえにひっかかり、地をはうつる草に足をとられながらけんめいにあとを追います。けれどサヨナラとの距離はひらいていく一方です。

そして茂みの合間に見えかくれしていたサヨナラの白い豊かなシッポは、やがて一輪の花のようにボウツとかすむと、一面の緑の中にかき消えてしまったのです。

「サヨナラ！ サヨナラ！」

トンカチがいくら叫んでも、返ってくるのは森の静けさだけです。まったくサヨナラときたら、白くてまるいものなら、なんでも大好きときているんだから、始末におえません。

公園のホロホロ鳥は追いちらしてしまふし、『にぎやか通り』のかん物屋の店先の卵はくわえてしまふし、白いねこなんか見つけようものなら、たぶの木のとっぺんまで追いあげたきり、三時間も木の下にがんばっているんですから。

じっさい、サヨナラが持っているいくつかの欠点の中で、その「白くてまるいものが好き」は、いちばん大きな欠点なんです。

（それにしても……）

トンカチは、ゴタゴタと入りくんだ木立ちの間を歩きまわりながら、いまましいナゾナゾの答を、ああでもない、こうでもないと考えていました。

ホロホロ鳥でもないし

野球のボールでもない

ゆで卵でもないし

白いねこでもない

森の中を横切つてゆく

白くてまるいものっていったい何だろう？

どれだけ歩いたことでしょう。サヨナラを見失ったあたりを、あてもなくさまよいながら、霧にけむった一本の大木の下を通りかかったときです。トンカチはおかしな声に呼び止められました。

「なんだい、なんだい。悲しそうな顔をして。」

トンカチは、びっくりして立ち止まりました。

「こんな森の中を、いったいどこまでいこうっていうんだい。」

話しかけられているのは、確かに自分のようです。トンカチはそろそろとふり返りました。けれどそこには水たまりがひとつ、ぼっかりと空を見上げているだけです。（気のせいだろうか。森の中にはいろんな音が聞こえるっていうから。）——トンカチはまた歩き始めました。すると三歩といかぬうちに、またあの声が呼びかけるのです。

「心配ごとなら話してごらん。いい知恵があれば貸してあげよう。なに、いい知恵がなくなつたって、話したただけでも気が晴れるってものさ。」

どう考えたって、声のあたりには水たまりしかありません。トンカチは、どんぐりをひとつ拾うと水たまりに投げ込んでみました。

すると、

「おいおいむちゃなことをするなよ。」

叫んだのはやはりその水たまりでした。

トンカチは、水たまりの前にしゃがみこんで、自分の顔をうつしてみました。そして、

「やあ、こんにちは。」

と声をかけました。

「ほんとに、こんにちは。」

水たまりが答えました。しゃべるたびにその水面には小さな波紋が、いくつも広がります。

「ぼくはトンカチ。サヨナラをさがしているんだ。」

水たまりに向かってしゃべっていると、鏡の中の自分に話しかけているような、妙な気持ちになってきます。

「ふーん。トンカチかい、なかなかいい名前だ。姓名判断でゆくと、努力しだいで運命をどんなふうにも変えられる名だよ。しかしサヨナラっていうのはいかな。」

「どんなふうに？」

「本人がいかに努力^{とらう}しても、すべてと別^{わか}れる運命^{うんめい}にある名前だよ。まあ見つけるのは容易^{やす}なこっちゃないな。」

「犬でも運勢^{うんせい}はおなじなのかい？」

「何？ 犬だって。サヨナラは犬なのかい。じゃあさつき、わたしを飛^とびこえて走^{はし}っていったのが、サヨナラかなあ。」

「きつとそうだよ。白くて、まるいものを追いかけて、このあたりで消^きえちゃったんだけど、ついでに、あの白くてまるいもの^{もの}のことも聞いておこうかなあ。」

「ありやあ、何ともいえんなあ、人間でも犬でも水たまりでもないのさ。サヨナラとかいう犬は、あいつを追いかけて、すごい顔をして走^{はし}っていったから、これからいっても、追いかどうかなあ。」

「あーあ、ぼくはもういやになっちゃったよ、いったいどうしたらいいんだろう。」

「この先にある『ワライカワセミの森』を抜^ぬけて『何でも見えるが丘^{おか}』にいつてごらん。丘^{おか}の上に立つと『あねもね館^{かん}』っていうへんてこな家が見えるよ。そこに住んでいる連中^{れんちゆう}をたずねてごらん。きつと力を貸^かしてくれるだろう。しかし、みんながいくら手伝^{てだ}つてくれても

むだだろうなあ。どうしてもその犬を見つけないのなら、今すぐにでも改名することだね。どうだろう、『コンニチハ』っていう名は……」

冗談じゃありません。こんなところで改名している暇なんてないのです。

「ワライカワセミの森を抜けて、何でも見えるが丘に立って、そこから見える、えーと何だったっけ。」

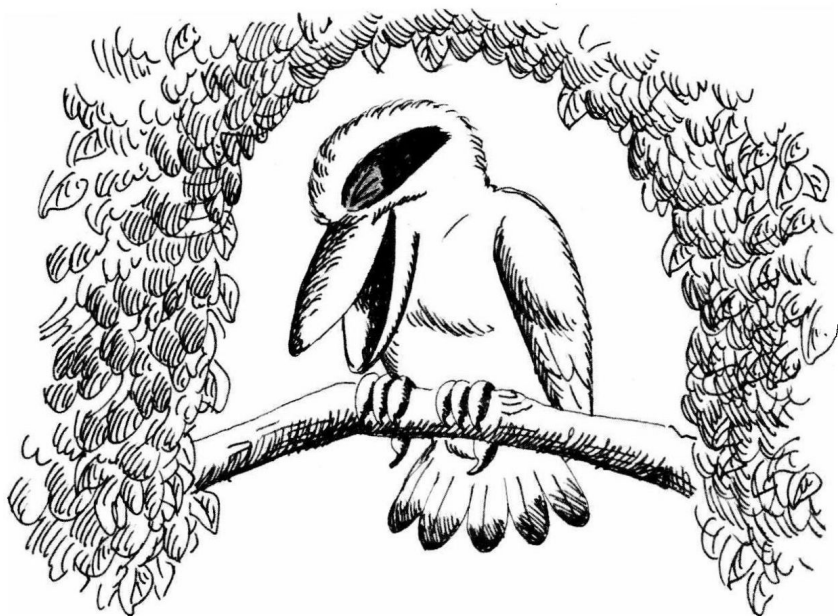
「あねもね館。」

トンカチは、いろいろと聞きなれない名前が続くので、忘れないうちに早くいこうとあいさつもそこそこに立ち上がりました。

「また何かあったらたずねておいでよ。」

「うん、ありがとう。きみは、親切なんだね。こんど、ケンと、ノンに会ったらいつておくよ、水たまりを見ても、石なんか投げ込むなってね……」

トンカチは、一気に森を抜けると、やがて水たまりのいったとおり、『ワライカワセミの森』という白い立札の立っている森の入口にさしかかりました。（こんな所、早く通り過ぎちゃおう）そう思っ、走ってきた勢いで森にふみこんだとたんです。突然けたたましい笑い声があちこちから降りそそいできました。



「ケツケツケツケツ。カツカツカツカツ。」

おどろいて見上げると、頭のすぐ上につき出しているソロの木の枝で、一羽のよくふとつたワライカワセミがおなかをよじって笑いかけています。

「何がおかしいんだい。」

トンカチは肩をそびやかして、たずねました。

「おまえが急いでいくのがさ。」

枝にしがみついて笑いながらカワセミが答えます。

サングラスをかけたような目、コッペパンみたいなくちばし。そしてつやのよいクリーム色のからだをゆすって笑うたびに、太いソロの枝がユサユサとゆれています。

「ぼくはサヨナラをさがしているんだ。急ぐのはあたりまえじゃないか。」

トンカチはソロの木の真下まで歩いていくと、ムツとしていました。

「へッへッへッへッ、逃げてくやつを追いかけてるよ。そうやってみんな、いつまでも地球をぐるぐる回っているんだ。カッカッカッカッ。」

「サヨナラは逃げてなんかないよ。迷っているだけだい。」

「ケッケッケッケッ。逃げたやつも迷っているし、さがすやつも迷っているよ。ウヒーッおかしいよお。そうしてだれもがもとの場所を忘れちゃうんだ、アッハッハッハッハッ。」

こんな鳥を相手にしていたって、時間がむだになるだけです。トンカチは、スタスタと歩きはじめました。笑い声は枝から枝、葉から葉を伝わってあとを追いかけてきます。だれだって背中越しに笑われるのは、気持のよいものではありません。歩きながらついふり返ると、カワセミはあちこちのこずえをはね回り、トンカチを指さして、おなかをかかえて笑いこらげています。

「フヒーッヒッヒッヒッ。四本足で逃げるやつを二本足で追いかけていくよお。」

「いいかい、ぼくは逃げだすんじゃないんだ。きみみたいなのを相手にしている暇がないからいくんだよ……。」

トンカチはそういうとまゆをつり上げて一気に走り出しました。

「あねもね館へいくよ。あねもね館へいくのがおかしいよおー！ ケッケッケツツ。」

うしろのほうでそんな笑い声が聞こえました。くねくねとソロの大木の間を道は続いていきます。

こずえのかなたに見える湖のような青空が、何だかずいぶん遠のいてしまったように感じます。

『あねもね館』なんてほんとうにあるんだろうか。』

トンカチは、歩きながら何度思ったことでしょうか。

そのとき、ゆくてに一匹の白いちやうがひらひらとあらわれました。目にしみるように白い、真新しいハンカチのようなちやうです。トンカチは一瞬、サヨナラが飛び出してきたのかと思いました。

やがてちやうは二匹になり、おやと思う間に、三匹、四匹としだいに数を増していきます。トンカチは太い幹の間から手品のように次々と舞い出てくるちやうのように氣をとられて歩いていました。すると、森は夜明けの短い夢のように、何の前ぶれもなく突然とぎれ、トンカチは目のくらむような明るい丘の上に出たのです。